

江本祐治・芝原鐐一両先生を偲んで

吉 田 淳 三*

昨年(1971年)は日本天文学会にとってまことに悲しむべき年でありました。早春3月21日江本祐治先生が亡くなられ、また年の瀬も近い12月10日には芝原鐐一先生が忽然として他界され、我々一同哀惜の感に堪えません。

江本先生は大正5年(1916年)1月17日福岡県田川郡香春町の出生、第七高等学校から京都大学宇宙物理学科に進まれ荒木俊馬先生の薫陶を受けられて昭和14年3月卒業、16年10月九州大学工学部に助手として赴かれ栗原道徳先生の指導の下にその翌年には助教に昇任、流体工学研究所員として活躍されましたが不幸にして病を得られ第二次大戦後の混乱期を福岡県の郷里にて養生に努められました。ようやくにして健康が回復するや学問に対する情熱押えがたく、昭和30年住居を京都に移され非常勤講師として大阪学芸大学(現大阪教育大学)や京都大学に勤務されるかたわら恒星天文学の分野において次々に業績を挙げていかれました。独創的な着意に基づく銀河回転に関する研究や高速度星の研究、さらに青色微光星の研究など銀河系の構造や進化の問題について貢献するところ多大なものがありました。これらの研究により昭和37年理学博士の学位を得られました。先生はまた恒星天文学研究会(SAM)が飛躍的に発展した昭和35年以降関西における有カメンバーの一人として大いに活躍され、特に36年夏、信州池の平で行なわれた第1回夏の勉強会は江本先生の提出された基本構想に基づいて運営されたやに聞いております。また岐阜県鯉ヶ野における第8回研究会にも折悪しく来襲した台風の中を会場設営や宿舎の手配にどしゃ降りの中を駆け回られるなど先生の実存はその酒豪振りとともに毎回出席者一同のこの上ない励みとなったものでした。

昭和37年6月岐阜県立医科大学教授に就任、単身岐阜に赴かれ京都岐阜間のピストン運転ではありましたが、ようやくにしてそれまでの不遇な時代に終止符をうたれたかに見えました。しかるに同大学の国立移管の問題が起こるや最後まで医科大学教授として踏み止まれ複雑な人事関係が円滑に処理されるようあらゆる努力を傾注され、昭和42年6月やっと岐阜大学教養部に移られました。この後1年ほどは平穏でしたが昭和44年全国的に大学紛争が激化した折には学生・教員の絶大な信望の下に教養部補導委員長長の職にあり、教養部校舎の占拠

封鎖という事態が生ずるや学生諸君との度重なる対応、相継ぐ会議、打合わせ会等に持てる限りの一切を傾け尽して対処されたのであります。この激甚なる数ヶ月が先生の肉体にどのように作用したのでありましようか、一見極めて頑健そうでありながらその実多病で入院療養されることも多かった先生の体内にすでに巣食っていたであろう病魔の跳梁を許す結果となったのであります。年を越えて45年1月胃の切開手術を受けられ、一時回復されたものの46年1月再度入院された時はすでに癌の転移が絶望的に進んでいたらしく2カ月余りの間に次第に衰弱され3月21日早朝遂に不帰の客となられたのであります。

先生は豪放豁達、常に不屈の信念を内に秘めて率直に事に対処されました。七高時代より弓をよくされ一時京都大学教養部の体育を担当されて弓の指導にあたられたこともあり、岐阜でも絶えず弓を手にされ夕方など無造作に実験衣を引かけズックを突かけて弓道場に出かけられるという風でありました。一方また非常に繊細で音楽をこよなく愛され、大垣の奥、桃畑の中に家を構えられ、広大な宇宙に想いをはせ、また一人静かに古典音楽に聞き入り、書を楽しまれ、さらに気が向けば自ら料理の本を繙いて自前の料理に舌鼓を打たれるなど、まことに恬淡としてその生涯を終えられました。

亡くなる数年前から古典統計力学、ボルツマンや特にギブズの根本思想を再吟味し統計星学の基礎付けに役立たしめようと努力しておられたようで未完のノート1冊が残されたおりました。まことに掛け替えのない人を失ったものであります。

芝原先生は大正9年(1920)1月17日名古屋市の出生、第八高等学校から京都大学宇宙物理学科に進まれ荒木俊馬先生の指導を受けられ天体力学を専攻され昭和18年9月卒業、大戦後の混乱期を苦勞され昭和23年4月広島高等師範学校に講師として赴任、26年教授に昇任されましたが翌年学制改革により同校が廃止されるに及び帰洛、その後昭和30年から仏教大助教に就任、昭和37年教授に昇任、こえて38年竜谷大学に移られました。この間、昭和37年に三体問題の定性的研究で理学博士の学位を得られました。

先生は早くから両脚部に血行障害があり、八高時代から再三におよぶ副交感神経節の除去という大手術を受けられたにもかかわらず完治するに到らずその後も長く苦

* 京都産業大学理学部

生まれ、昭和44年7月には遂に左下脚部切断のやむ無きに到るなど、肉体的には極めて苛酷な状況にありながら天衣無縫、飄々としてその命運に甘んずるという風でありました。孝心殊の外厚く44年左足切断後母堂に余計な心配を掛けまいとしてか足のことについてに遂に一言も触れられることがなかったそうであります。温厚にして曾って先生の怒られたということ聞きません。非常に緻密明晰で天体力学はもちろんのこと、広く解析学全般に亘って造詣深くさらに整数論についても深い興味をいだいておられました。昭和30年頃でしたらうか、藪内清先生の下に届いた希爾米著董金柱訳「天體力學中の n 體問題與天體演化學」(ヒルミの著書で後何度か先生の論文にも引用されるものの中国語訳)を譲り受けられたのが一つの機縁ともなり、パーコフ、シャジャーに始まりソ連邦ヒルミ、メルマン達によって発展せしめられた一般三体問題の定性的研究を我国に紹介されるとともに重心に関する慣性能率についてのラグランジュの等式に基づくパーコフ、メルマンの方法を簡明美麗な形にまとめられるなど精力的に研究を進められたのであります。44年の大手術の前後一時中断、最近また有界条件などを取り上げて活発に研究を続けようとなさっておられた矢先の今度の御不幸、まことに残念でなりません。

先生はまた日本の古典を愛され古今集、新古今集などの和歌、芭蕉、去来、蕪村などの俳句にも興味を寄せられ、歩行には難渋されましたが旅行を好まれ、和洋の推理小説はそのほとんどのものを読破しておられました。さらに先生は独自の宗教観、人生観をいだかれ知友を求めて別け隔てなく広く交際されるという風でありました。そのようなことからしばしばいろいろな方々のお世話もされ、単に京都宇宙物理学教室の後輩諸氏のみならず

幅広く人文・社会の分野にまで亘って多くの人達が先生の恵与に浴したのであります。先生がお世話されると不思議に話がうまく運んだことは先生の人柄の一端を如実に示しているものでありましょう。昭和40年荒木俊馬先生が京都産業大学を創設されました折、荒木先生の下で新大学の、とくに理学部の設立について江本先生等とともにいろいろ尽力され、また竜谷大学自然科学系の陣容強化に努力されましたことも逸することができません。

江本・芝原先生はともに学問を心より愛され、如何にその道が艱難苦渋に満ちたものであろうと何かのためにはなく真に学問そのものを愛し、学問そのものを楽しむという風でありました。江本・芝原両先生は単に同学の先輩後輩というだけでなく、また研究分野における恒星天文学と天体力学という違いはあったにせよ、誕生日が同じ1月17日ということや身体的な疾患障害、長く続いた社会的不遇など不思議に相似た境遇におられ互に敬愛され絶えず親交を暖めておられました。昨年両先生が相次いで世を去られましたのも何か連れ立ってはるかなる大宇宙の彼方に旅立って行かれたように思われてなりません。江本先生は55歳、芝原先生は51歳でありました。

私は江本先生が岐阜にお出になったとき一緒に岐阜に行き3年間御指導を受け、また芝原先生には広島高師在学中より御指導いただきその後も単に学問上のことのみならずあらゆる面でお世話になって今日に到ったものであります。両先生の亡き今、心中の寂莫たる感はこれを如何ともなしがたいのであります。最後に両先生の御冥福を念願しつつペンをおきます。

芝原鏡一氏の遺稿 (1971年12月1日付、萩原雄祐氏あての書簡)

晴天つづきの11月から師走へ寒い日がつづいて居りますが、先生には益々御清栄のことと拝察致します。さて昨日先生の赤い美しい回転流体の平衡形状論を拝受致しました。嬉しくてたまらない気持ちで、先生の *Celestial Mechanics* vol. 1 の傍に並べてみたり、またひっぱりだして頁をくったりして、一日中心も浮き浮きして居りました。本当に有難うございました。

三体問題と共に古典的香りの最も高い理論、人類の作った最も美しい芸術品の中からその粋ばかりをまとめた様な各章は恐らく私の心を酔らせて了ふことと今からたのしみにして居ります。昔岩波講座の先生の講義からリヒテンシュタインの理論を知り、M. Z.

(*Math. Zeitschr.* の略: 編集部註) を借り出して何日もかかって手うつししたことを思い出します。この冬にゆっくり楽しませて戴くことにいたします。(中略)

其後三体問題の方は一向進んで居りません。Lagrange Stability の十分条件は出来上らぬままですが、仲間の吉田淳三君がヒルミやメルマンの双曲楕円型の十分条件を少し精度をよくし、堀さんのところでやって居られる Szebehely の数値例に使い易い様に改良して居ります。1月の研究会にこんな話を京都から持ってゆくことになるかと思ひます。私の方は先月中旬より黄疸で静養中で一寸1月の20日頃の予定はたちませんが Lagrange Stability に何か目鼻でもついたら無理にでも出席したいと思つてをります。(後略)